

はじめに

教育実習で母校である中学校にお世話になった。本レポートでは、この3週間で体験したことや学んだことを述べる。

社会科教員として学んだこと

実習では1年生の地理で「アジア州」の単元の一部を担当した。指導教員の先生がPowerPointとプリントで授業を行っていらっしやったので、今までの授業と異なる形式は生徒が混乱すると考え、私も同じ形式の授業を行った。

現在、社会科の成績はテストの点数や提出物の提出状況のみで判断するのではなく、ポートフォリオや単元ごとの「パフォーマンス課題」も用いて評価する。パフォーマンス課題とは、授業で得た知識やスキルを複合的に活用し、自分の言葉で表現することができるかを評価するための課題である。今回のアジア州は途中から私が担当するようになったので、指導教員の先生が生徒に出題した。1時間の授業を使って生徒に考えさせていたのを見学していると、生徒たちは教科書や資料集、ノートなどからあらゆるヒントや資料を探し、黙々と取り組んでいた。評価基準は「授業で学習したアジアの地理的關係(文化)、自然(資源)、人口、経済発展の特徴を踏まえ、複数の事例を挙げて提案できているか」、「地理的な事実をもとに論理的で説得力のある選択をしているか」など、今までに学習してきたことが複合的かつ論理的に活用できているかが評価の観点とされていた。

このような単元末のパフォーマンス課題を考えるにあたっての材料となるように、日々の授業はある程度の方向性を持ってテーマを作る必要があった。担当教官の先生が、「社会科は生徒に生きていく力を与える最も大切な教科である」と仰っていた。実習では、そのような力を与えるにはどのようなパフォーマンス課題を単元ごとに設定するのか、生徒にその課題を達成させるためには各時間の授業にどのような目標を設定すべきか、生徒に本授業の目標に意欲的に取り組んでもらうためにはどのような授業の導入をするべきか、資料はどのようなものを用いるべきか…と逆算して考えながら授業を構成した。地理・歴史・公民の3分野で生徒に系統的かつ段階的に学習させ、螺旋状に能力や知識を積み上げていくことで成長させられるような授業を構成することを目標とした。

担任業

担当していたクラスでの担任の仕事として、朝および帰りのSHRでの「先生からのお話」、自主ノートのチェックと返信、給食台の除菌、掃除の監督などを行った。

SHRでの先生からのお話では、最終的に子どもたちに自分たちのこととして考えてほしい

こと、自分たちで今一度振り返ってほしい言動などをテーマとした話をした。そのテーマに至るまでの導入では、私の中学生時代の話や最近のニュースなどから生徒が興味を持ちやすいような話をした。

自主ノートとは生徒が自主学習をしてきたノートではなく、次の日の時間割と持ち物、日記を綴るノートである。生徒たちはそれを毎朝担任に提出し、帰りの SHR に返却されたそれにまた明日の時間割などを書き、帰宅後日記も書いて翌朝提出する。実習中は私が日記をチェックし、その生徒が今日どんなことに何を感じたのかを知り、それにコメントを返した。時には担任に相談したいことや悩みを書いている子もいるので、そういった内容の場合は担任の先生に報告し、判断を仰いだ。普段あまり話す機会がない生徒に対しても、この自主ノートを通じてお互いの信頼を深められた。

給食台の除菌は、新型コロナウイルス感染予防の観点から、給食後に担任がアルコール除菌を行う。今の時勢での給食の様子は、後の「新型コロナウイルスの感染予防対策と学校生活への影響」にて述べる。

本校では掃除を無言で行うことをルールとして取り決めており、生徒たちが掃除を怠っていないか、無言で清掃ができていないかどうかを教員が監督する。

実習中に任せていただいた担任の仕事としては以上のものとなるが、実際の担任業には他にも数多くの仕事がある。担任をするにあたり、常日頃から生徒一人ひとりを観察し、生徒の成長にどのような支援や指導が必要なのかを分析することが重要であると考えられる。

ICT 教育の実際

GIGA スクール構想にて、市から一人一台のタブレット端末が配備されている。現在の1年生は小学校6年生の時点で配布されているので、扱いに戸惑う生徒は少ない。授業では班で調べ学習をしたり、課題をみんなの前で発表する際などに使われている。

ただ、一人一台の端末が用意されていても、通信速度などの課題がある。6人の班で1～2台をネットに繋いで用いる場合は通信速度の低下もなく安定して使用できるが、一人一台でネットに繋ごうとすると接続できない生徒が続出した。他にも、授業のタイミングによっては更新プログラムの影響でネットが使えない生徒が数人いたりするなど、生徒全員がスムーズに ICT を活用できる環境であるとは言い難かった。

これは学校だけの問題ではなく、市の教育委員会とも連携して改善していくべき問題である。現在の自分の所属する学校の環境を把握し、ICT 支援員の方とも相談して、どのような学習活動なら可能であるかを見極めて活用していく必要がある。

新型コロナウイルスの感染予防対策と学校生活への影響

学校現場では、昨年度と同様の感染予防対策が執られている。

生徒には毎朝自宅にて検温した数値を検温カードに記入させ、登校時に玄関で教員に提出させる。玄関や各教室にはアルコール消毒液が設置されており、生徒には移動教室などの際

にも手指のアルコール消毒をさせるようにしている。

給食時には給食当番以外の生徒は着席させ、給食当番もエプロン、マスク、使い捨てのポリエチレン製手袋を装備して給食を配膳している。食べる際には黙食を徹底し、給食を早く食べ終わった生徒には自習や読書を行うように指導する。本校の牛乳は紙製のパックで、従来であれば食後に水の入ったバケツにてすすぎ、きれいに開き給食室で回収していた。しかし、飲んだ牛乳のパックを複数人が集中するような状態で一つのバケツですすぐ方法は感染リスクがあるとして、現在ではパックの体積が小さくなるように潰して袋に入れ回収している。給食後、食器などを給食当番が給食室へ戻しに行くのは従来と変わりはないが、給食台やトレイなどの除菌は教員が行うこととなっている。

実習を通じて、以上のような感染防止対策の雑務が増えたことで、教員の本来すべき業務を行う時間が減少している現状を目の当たりにした。生徒たちの健康や命を守るために欠かせないこともあるが、教育委員会などと相談して、自動検温システムの導入などを図り教員の負担を減らす取り組みが必要である。しかしこれらの課題も、公立の学校では自治体の予算が関係するので、すぐには解決できない課題となっている。

特に緊急事態宣言が発令されていたこともあり、その影響も受けている。通常春に行われる授業参観は市内の学校全てで中止となり、本校で行われる予定であった体育大会は延期の措置が執られた。部活動においても、市内総合体育大会に出場する部以外は土日の部活動が禁止され、試合の応援も出場する選手の保護者以外は禁止されていた。

昨今の情勢で子どもたちは様々な場面で我慢をしてくれているので、これらの措置を生徒たちに説明するときには、なぜこのような対策をしなければならないのか、この措置にはどのような意味があるのか等を教師が教えたり、考えさせたりする必要がある。

おわりに

この3週間を通じて、大学の授業では決して学べない非常に多くのことを体験することができた。教師という立場で様々な仕事を経験するにつれ、教育現場の現実や学校経営のあり方、先生方の協働体制や校内外との連携など、生徒の担任をする、教科を教える以外にも多様な業務があることを身をもって知った。今回学んだことや生徒の笑顔を、これからの人生の糧としていきたい。